九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[002]アジア総合政策センター紀要表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/13308

出版情報：九州大学アジア総合政策センター紀要. 2, 2007-09-28. 九州大学アジア総合政策センター
バージョン：
権利関係：

年　報（2006年度）

Kyushu University Asia Center

１．九州大学アジア総合政策センターについて

２．対外イベント実施項目一覧

３．メールマガジンの発行

４．日中韓シンポジウム実施報告

５．九州大学アジア理解講座　実施報告

６．九州大学アジア塾　実施報告

７．Soaked in Asia（SIA＝サイア）報告
　　―アジアの心の情報を発信する

８．アジア関連研究室紹介

９．九大アジア叢書発行

10．アジア総合政策センター交流支援事業

１．九州大学アジア総合政策センターについて

九州大学アジア総合政策センターは2005年７月１日、従来のアジア総合研究センター（略称KUARO）を発展的に解消する形で、大学と社会との新たな係わり、アジアとの関係重視を機軸に外部から５人の特任及び専任教員を迎えて設立され、２年目を迎えた。2006年度もアジアを巡る様々な活動を展開し、アジア情報の発信を行なった。(詳細はアジア総合政策センターホームページを参照。http://asia.kyushu-u.ac.jp)

■設立理念

アジアが世界を先導し、アジアが時代を動かす現代において、九州大学が指向するアジア重視戦略に基づき、九州大学がすでに有する知的・人的資源を最大限に活用しつつ、九州大学内と学外＝日本国およびアジア諸国を中心とする諸外国の政府、自治体、企業、市民社会と連結（リエゾン）し、「九州大学へ行けばアジアが分かる」と言えるような社会的にも大きな影響力の発揮できるセンターとして存在したい。

これまでのアジア総合研究センター（KUARO）を発展改組し、これからの世紀を担うと目されるアジア、特にそのパワーの源とも言える大衆文化（ポップカルチャー）にも十分に着目しつつ、経済的な発展と国土の開発が進む現代アジアを総体的に捉え、政府、地元自治体、企業、市民社会に対して有益かつ有効な政策提言の行える調査・研究の実施できる、躍進するアジアに関する新たなシンクタンク（知的拠点）を目指す。

九州大学において進行するアジア関連研究のデータベースの整備と更なる充実に努めると同時に、率先してタスクフォースを立ち上げることで、アジアに関する学際的な研究が九州大学をベースとして今以上に活発に行われるべく牽引車の役割を果たしたい。

日本国内のアジア関連諸機関との連携に加え、アジア及び欧米の大学におけるアジア研究センター等とも学術的ネットワークを形成し、現代アジアが直面する諸問題に関し有益・有効な解決策や政策提言が行える研究を行ないたい。

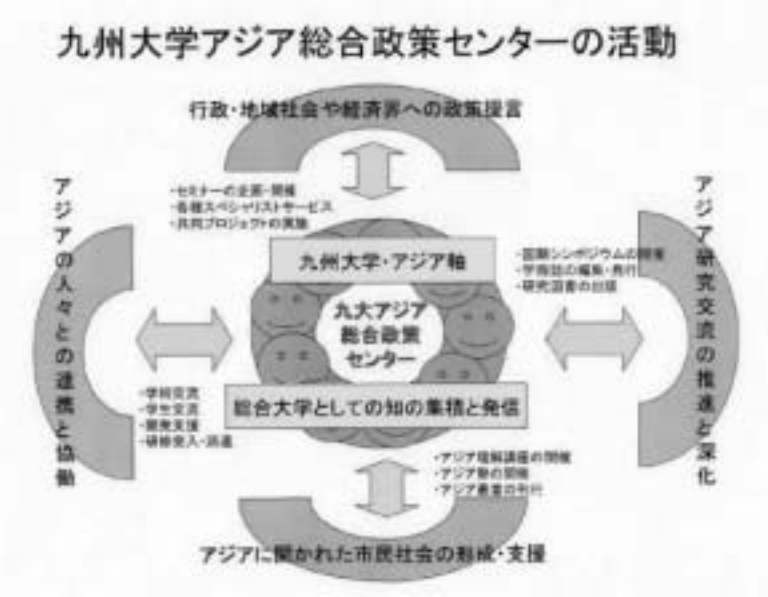
■設立の目的

センターは、現代アジアを相対的に捉え、アジアに関する知的拠点として、広く社会に向けて、有益かつ有効な政策提言を行なうための調査・研究を行なうことを目的とする。

■具体的な業務

１．政府、地元自治体、企業、市民社会等に対して有益かつ有効な政策提言を行なうための調査・研究
２．現代アジアの社会・文化的な変動の状況についての調査・研究
３．アジアにおける都市開発や農村開発とそれに伴う環境保全、精神衛生等の諸問題についての調査及び考察
４．アジアに関する調査・研究に立脚しつつ、政策提言を行なうに当たっての制度的、理論的・実証的な研究
５．国内のアジア関連諸機関との連携、また、アジア及び欧米の大学におけるアジア研究センターとの学術的ネットワークの形成
６．現代アジアに関する研究成果を反映した実用的な教育プログラムの実施
７．現代アジアに関する公開セミナーや公開講座等の実施
８．現代アジアに関する有益な情報や調査・研究成果の情報の収集と発信

■センターの活動のイメージ図



■アジア総合政策センター構成員（2007年３月31日現在）

委員長／センター長事務取扱
・柳原　正治
　(理事・副学長)

副センター長
・坪田　邦夫

アジア現代文化研究部門

専任教員
特任教授
・髙樹のぶ子
教授
・大野　　俊

複担教員
・有馬　　學
　(比較社会文化研究院・教授)
・森川　哲雄
　(比較社会文化研究院・教授)

協力教員
・安立　清史
　(人間環境学研究院・助教授)
・源田　悦夫
　(芸術工学研究院・教授)
・森田　昌嗣
　(芸術工学研究院・教授)
・丸山マサ美
　(医学部・講師)
・杉谷　　篤
　(九州大学病院・助教授)
[学外]
・小川　全夫
　(山口県立大学・教授)
・ピニングトン ノエル ジョン
　(アリゾナ大学・助教授)

アジア社会開発研究部門

専任教員
助教授
・小川　玲子

複担教員
・出口　　敦
(人間環境学研究院・教授)
・原　　寿郎
(医学研究院・教授)
・甲斐　　諭
(農学研究院・教授)

協力教員
・南　　博文
(人間環境学研究院・教授)
・李　　一清
(言語文化研究院・助教授)
・稲葉美由紀
(言語文化研究院・助教授)
・大谷　順子
(言語文化研究院・助教授)
・小松　太郎
(言語文化研究院・助教授)
・緒方　一夫
(熱帯農学研究センター・教授)

アジア社会科学研究部門

専任教員
教授
・坪田　邦夫
・国吉　澄夫

複担教員
・永池　克明
(経済学研究院・教授)

協力教員
・吾郷　眞一
(法学研究院・教授)
・フェニック　マーク
(法学研究院・助教授)
・星野　裕志
(経済学研究院・教授)
・安達　明久
(産学連携センター・特任教授)

■事務スタッフ

氏　　名	所　　属
玉好　さやか	アジア総合政策センター事務室
堺　　由佳	アジア総合政策センター事務室

２．2006年度対外イベント項目一覧

2006年４月～2007年３月の期間に、アジア総合政策センターが主催、共催ないしは後援を行なったアジア関連公開講座、セミナー等、対外的なイベントは以下の通り；

日　時	イ　ベ　ン　ト　内　容	備　　考
６月19日	アジア理解講座 「ヒップホップ、アジア、グローバル文化：反戦の日本語ラップと若者」	主催：アジア総合政策センター 場所：九大国際ホール
７月11日	アジア理解講座 「アジアのジェンダーと政治」	主催：アジア総合政策センター 場所：九大国際ホール
８月４日	セミナー「平和を創る ── フィリピンのムスリム女性の視点から」	主催：アジア総合政策センター 場所：九大中央図書館会議室
９月30日	第２回SIA-DAY「高樹のぶ子と浸るベトナム」	主催：アジア総合政策センター 場所：アクロス福岡円形ホール
10月５日 ～ 12月25日	「マドンナたちのフィリピン ── 女性・キリスト教・多層文化 ── 展」	主催：福岡アジア美術館 展示企画：九大文学部美学美術史研究室・AQA プロジェクト 後援：アジア総合政策センター 場所：福岡アジア美術館 アジアギャラリー
10月26日	アジアの健康を考える会 第２回市民公開講座「知ろう！ アジアの病気 ── 広がるエイズ ──」	共催：九大病院地域医療連携センター アジア国際医療連携室、アジアの健康を考える会、三菱ウェルファーマ(株) 後援：アジア総合政策センター 場所：九大医学部百年講堂
11月14日	アジア理解講座 「アジアの市民社会と国家 ── NGO 活動の現場から ──」	主催：アジア総合政策センター 場所：九大国際ホール
11月14日 ～ 11月17日	Asia Forest Workshop 2006 － Interdisciplinary and Transnational Discussion on Multiple Impacts of Forestry and Landuse Change in Tropical Asia －	主催：九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト 共催：カンボジア森林局、カンボジア開発資源研究所 後援：アジア総合政策センター、森林計画学会、国際森林研究機関連合 場所：九大中央図書館視聴覚ホール他
11月16日 ～ 11月19日	(独)日本学術振興会 アジア・アフリカ学術基盤形成事業セミナー「ハイブリッドイネと農業生態系の科学」	主催：九大大学院農学研究院、九大熱帯農学研究センター 後援：(独)日本学術振興会、アジア総合政策センター 場所：九大中央図書館視聴覚ホール他
11月20日	第１回九州大学保健学科国際フォーラム2006 保健学における教育と実践	主催：九大医学部保健学科 後援：アジア総合政策センター 場所：九大医学部百年講堂
12月６日	国際協力シンポジウム 「教育協力の世界的潮流と現場からのメッセージ」	主催：九大国際交流推進室、アジア総合政策センター 場所：九大医学部百年講堂中ホール

日　時	イ　ベ　ン　ト　内　容	備　　考
12月16日	九大ビジネススクール特別講義（公開） 「東芝の中国事業から見た日中ビジネス」	主催：九大ビジネススクール 後援：アジア総合政策センター 場所：九大経済学府講義室
12月22日	アジア理解講座「アジアにおける臓器移植 ── その法と生命倫理」	主催：アジア総合政策センター 場所：九大総合研究棟 IT room（病院地区）
１月11日 ～ １月16日	空間を生み出す繊維の力 ── 李粉善ファイバーアート展 ウチとソトのイリュージョン	主催：アジア空間芸術創生研究会 共催：九大大学院芸術工学研究院藤原惠洋研究室、芸術文化環境学会 後援：(財)福岡市文化芸術振興財団、福岡市、アジア総合政策センター、(財)日韓文化交流基金、(財)福岡県国際交流センター、(財)福岡国際交流協会、九大大学院芸術工学研究院 場所：福岡アジア美術館　交流ギャラリー
１月14日	九州大学第３回アジア塾 「貧困と戦争と環境問題って関係ないと思ってた ── ボクと日本とアジアの未来 ──」	主催：アジア総合政策センター 協力：NPO 法人 環境創造舎、フェアトレードプロジェクト ashi、Agri-Project in 九州、FEEL、九大カタロカイ 場所：九大農学部５号館117
２月１日 ～ ２月２日	日中韓シンポジウム 「新しい連携と地域アイデンティティの形成にむけて」	主催：アジア総合政策センター 共催：中国社会科学院、韓国東国大学校 場所：九大医学部百年講堂
２月18日	JVC 九州ネットワーク設立15周年／JVC 代表交代記念シンポジウム 「紛争をなくすために、私たちにできること」 ～NGO の歩み・未来・地域展開を考える～	主催：JVC 九州ネットワーク、NPO 法人日本国際ボランティアセンター(JVC)、九大大学院言語文化研究院 共催：NPO 法人 NGO 福岡ネットワーク(FUNN)、NPO 法人明日のカンボジアを考える会（FACT)、NPO 法人久留米地球市民ボランティアの会(KOVC) 後援：福岡県、福岡市、福岡市教育委員会、(財)福岡国際交流協会、アジア総合政策センター
２月22日	第１回 ICABE 九州・中国ビジネス研究会 「東アジアの企業間国際競争と工程分業ネットワーク」	主催：九大ビジネススクール 後援：アジア総合政策センター、専修学校久留米ゼミナール、(株)アジアソリューション 場所：アクロス福岡セミナー室
３月17日	第３回SIA-DAY「高樹のぶ子と浸る台湾」	主催：アジア総合政策センター 場所：アクロス福岡円形ホール
３月23日	第２回 ICABE 九州・中国ビジネス研究会 「中国ビジネスの光と影 ── 体験的中国ビジネス論」	主催：九大ビジネススクール 後援：アジア総合政策センター、専修学校久留米ゼミナール、(株)アジアソリューション 場所：アクロス福岡会議室

３．メールマガジンの発行

アジア総合政策センターでは、「アジアセンター通信」として、2006年４月から2007年３月まで以下の「お知らせ」内容を含む「メールマガジン」を発行してきた。詳細はホームページを参照。

Vol.	タ　イ　ト　ル	発行日
06–Vol.02	学内 SIA「小説家の見た、触れた、感じたフィリピン 」開催	(06.05.08)
06–Vol.04	アジア理解講座「ヒップホップ、アジア、グローバル文化：反戦の日本語ラップと若者」開催	(06.06.02)
06–Vol.08	アジア理解講座「アジアのジェンダーと政治」開催	(06.07.04)
06–Vol.09	平成18年度アジア総合政策センター交流支援事業募集（学内向け）	(06.07.14)
06–Vol.11	フィリピン・ムスリム女性関連イベント開催	(06.07.21)
06–Vol.13	「第２回 SIA-DAY 高樹のぶ子と浸るベトナム！」開催	(06.08.17)
06–Vol.16	「マドンナたちのフィリピン ── 女性・キリスト教・多層文化 ── 展」開催	(06.10.03)
06–Vol.17	【学内限定】高樹のぶ子特任教授出演「九大カタロカイ３ ── 記す、伝える ──」開催	(06.10.06)
06–Vol.18	「第２回 SIA-DAY　高樹のぶ子と浸るベトナム！」開催報告	(06.10.11)
06–Vol.19	平成18年度アジア総合政策センター交流支援事業募集(第２回)(学内向け)	(06.10.12)
06–Vol.20	アジアの健康を考える会 第2回市民公開講座「知ろう！ アジアの病気 ── 広がるエイズ ──」開催	(06.10.16)
06–Vol.21	アジア理解講座「アジアの市民社会と国家 ── NGO 活動の現場から ──」開催	(06.10.26)
06–Vol.22	セミナー「ハイブリッドイネと農業生態系の科学」開催（(独) 日本学術振興会 アジア・アフリカ学術基盤形成事業)	(06.11.06)
06–Vol.23	「第１回九州大学保健学科国際フォーラム2006 保健学における教育と実践」開催	(06.11.16)
06–Vol.24	国際協力シンポジウム「教育協力の世界的潮流と現場からのメッセージ」開催	(06.11.27)
06–Vol.25	アジア理解講座「アジアにおける臓器移植 ── その法と生命倫理 ──」開催	(06.11.30)
06–Vol.26	第３回アジア塾「貧困と戦争と環境問題って関係ないと思ってた ── ボクと日本とアジアの未来 ──」開催	(06.12.06)
06–Vol.27	平成18年度アジア総合政策センター共催・後援およびアジアとの交流支援事業募集（第３回）(学内向け)	(06.12.07)
06–Vol.28	「空間を生み出す繊維の力 ── 李粉善ファイバーアート展」開催	(07.01.09)
06–Vol.29	日中韓シンポジウム「新しい連携と地域アイデンティティの形成にむけて」開催	(07.01.18)
06–Vol.30	シンポジウム「紛争をなくすために、私たちにできること」開催	(07.02.09)
06–Vol.31	「第３回 SIA-DAY 高樹のぶ子と浸る台湾！」開催	(07.02.21)
06-Vol.32	講演会「忘れられたエスニック・ジャパニーズ ── アジア・太平洋の場合 ──」開催	(07.03.23)

４.「日中韓シンポジウム」実施報告（２月１–２日　於：九大医学部百年講堂）

2007年２月１–２日の両日、医学部百年講堂で「日中韓シンポジウム ── 新しい連携と地域アイデンティティの形成にむけて」と題する国際会議を、九州大学アジア総合政策センターの主催、中国社会科学院、韓国・東国大学校の共催により開催した。

基調講演者の韓国・東国大学校日本学研究所所長、洪潤植教授(左)と中国社会科学院日本研究所所長、蒋立峰教授

■報告者は日本、中国、韓国の研究者や実務者40名余り、一般市民を合わせて２日間でのべ500名が参加した。主催者の挨拶では柳原正治理事・副学長が本シンポジウムの主旨について、政治的な軋轢はあっても福岡は歴史的にアジアの玄関口であり、九州大学も早くからアジアの留学生を受け入れるなどアジア重視戦略をとっており、隣人として共に生きるということを考えるべきであり、「未来志向」で日中韓関係を考えたいと述べた。

■初日の基調講演では、中国社会科学院日本研究所所長の蒋立峰教授と東国大学校日本学研究所所長で九州大学特任教授の洪潤植教授が、日中韓に共通するものとして「和」の精神があり、お互いの文化や価値観を尊重しながらナショナリズムを超えての「北東アジア共同体」の創設（蒋教授）や「東アジア地域主義の発展」(洪教授）などを提唱した。午後の報告では、ＥＵの経験と東アジアとの相違や、日中韓のジャーナリストの交流や連携、企業間の分業と競争、３カ国の急速な高齢化とそれへの対応などについて、現状分析と具体的な取り組みが紹介された。

パネルディスカッション「日中韓に新しい東アジアのアイデンティティは形成されるか」

■また、「日中韓に新しい東アジアのアイデンティティは形成されるか」と題するパネル・ディスカッションでは、会場の参加者にアンケートを通じて議論に参加してもらった。アンケートは２者択一と自由記述の質問で構成され、「あなたは、自分はアジア人と思いますか」という質問に、回答者56名中52名（92%）が「はい」と答え、「あなたは自分が東アジア人と意識したことはありますか」という問いには56名中43名（76%）が「はい」と答えた。この質問はＥＵが市民を対象に行っている調査を東アジアの文脈に置き換えたものであったが、シンポジウムの参加者が中国や韓国に対する関心や意識が特に高いとはいえ、「アジアの玄関口」である福岡に暮らす市民のアジア志向の強さに、設問を用意した当センターのスタッフは一同に驚いた。また、「日中韓が仲良くするために何が必要と思いますか」という質問に対しては「相互に認め合って尊敬しあうこと」「共生の意識」「市民交流や若者の文化交流が必要」などの回答が寄せられた。

■２日目は「ポップカルチャーと基底文化」「医療・生命倫理」「産業連携」「高齢化社会とアクティブ・エイジング」の４つの分科会に分かれ、各分科会とも３カ国の５～７人の研究者や実務者が報告、討論した。出席した市民へのアンケートでは「韓国、中国は近い国なのに、知らなかったことが多い

2日目午後の臓器移植と生命倫理を巡る日中韓テレコンファレンス

のに気づいた」「中韓も日本と同じ問題を抱えていることがよくわかった」などの回答を得ることができた。午前と午後の計5時間の分科会だったが、「時間が短いのが残念」「来年も開催して欲しい」との要望も出され、このテーマに対する関心の高さが感じられた。

■午後3時からは「東アジアにおける臓器移植と生命倫理 ── 医者、患者、識者はどう考える」と題して九州大学、清華大学、ソウル大学をインターネットの高速回線で結んでの3元同時会議が行われ、3カ国の臓器移植をめぐる現状と課題について患者を交えた報告が行われた。その結果、欧米に比べてドナーも移植件数も少ない3カ国の共通課題が浮き彫りになり、東アジアの医療倫理の確立などに向けて今後も3カ国の医療関係者間で連携を進めていく意思が確認された。

■最後の全体会議では、2日間の議論を踏まえ、大学、行政、産業界などに向けての提言が採択された。提言には、①相互の理解と信頼醸成のための共同研究の促進、②教育、研究、ビジネス、ジャーナリズムを含めたあらゆるレベルでの人的交流の活性化 ── などが盛り込まれた。(提言詳細は、本「紀要」第1章「政策提言」に掲載)

今回のシンポジウムほど、日中韓における広域の問題をテーマにした国際会議はほとんど初めてということもあり、その催しの内容や議論については、朝日、読売、毎日、日経の全国紙、西日本新聞、NHK など多数のマスメディアによって報道された。

■政治的には緊張関係にある日中韓の3カ国において、研究者や実務者の意見交換などを通じて相互理解と信頼を築いていこうという趣旨で企画されたが、その意義を評価する中韓の共催者から今後も継続しようとの意思表示があり、福岡で始めた日中韓シンポジウムを2007年11月にソウルで、2008年には中国で開催する方向で関係者が準備を進めることになった。

５．九州大学アジア理解講座　実施報告

アジア総合政策センターではダイナミックに変貌するアジアに対する理解を深める目的で市民向けの講座を定期的に開催している。2006年度は以下の講座を開催した。

１）ヒップホップ、アジア、グローバル文化：反戦の日本語ラップと若者

日時：2006年６月19日（月）　15：00〜17：00
会場：九州大学国際ホール

■プログラム

司会　　岡崎　智己　九州大学アジア総合政策センター長・教授
第１部　講演
・イアン コンドリー（マサチューセッツ工科大学外国語外国文学学科助教授）
・一木　順（筑紫女学園大学英語メディア学科助教授）
第２部　ディスカッション
【パネリスト】
・イアン コンドリー
・一木　順
質疑応答

■概要

イアン・コンドリー氏は、1970年代にニューヨークの黒人の間で始まったヒップホップが全世界に普及したことを、下からのグローバル化のプロセスとして捉え、ヒップホップが日本においてどのようにローカル化していったのかを論じた。日本のラップは、日本的な表現や意匠を取り入れ、短歌などの形式を用いて日本化する一方、アジア太平洋戦争やイラク戦争などの政治的なテーマを表現していることを豊富な事例を通じて紹介した。そして、観客やメディアが錯綜する「現場」におけるパフォーマンスによって、新しい若者文化が生み出されている、と指摘した。

一木順氏は、アメリカで誕生したヒップホップがアジアに伝わることによってアジア独自の社会的文脈に織り込まれ、アメリカのヒップホップとは別の文化として再領域化されていることを指摘した。ヒップホップが再領域化される指針として言語、コンテンツ、トラック（音源）の３つをあげ、韓国やモンゴルのヒップホップを通じてグローバルとローカルが接合される具体例を紹介した。

パネルディスカッションでは、グローバルな音楽市場における日本のヒップホップの位置づけや「日本化」をどのように定義するのかという点が議論された。アメリカ発のヒップホップは、アメリカのソフトパワーとして機能せずにアジア地域で脱領域化され、アジアの若者たちに新しい表現の可能性と共感を広げている。

■参加人数：67名

2）アジアのジェンダーと政治

日時：2006年７月11日（火）　17：00〜19：00
会場：九州大学国際ホール

■プログラム

挨拶　坪田　邦夫（九州大学アジア総合政策センター 副センター長・教授）
講演
・ウルワシー・ブターリア（インド、出版社 Zubaan 代表、作家）
「南アジアの歴史と記憶」
・権　　仁淑（韓国、明知大学助教授）
「韓国の軍事化とナショナリズム ── ジェンダーの視点から」
・田村　慶子（北九州市立大学教授）
「移住労働者の女性化と開発 ── シンガポールの事例から」
質疑応答
〔通訳〕　竹中　千春（明治学院大学教授）
　　姜　　信一（九州大学法学府博士後期課程）
〔司会〕　小川　玲子（九州大学アジア総合政策センター助教授）

■概要

ウルワシー・ブターリア氏は1947年のインドとパキスタンの分離独立によって1,400万人が国境を越え、100万人が死亡し、12,000の女性たちが誘拐・強姦などを受けた物理的・精神的暴力の記憶が公的な歴史の中からは忘却されていることを指摘した。これまで男性によって語られることが多かった歴史をジェンダーの視点で見ることは、女性だけでなく周辺化された弱者の視点から歴史を捉えなおすことである。近年のインドの宗教対立に見られるように暴力の記憶は様々な形で噴出するので、その記憶を忘却するためには、まず記憶されなければならないことを主張した。

権仁淑氏は、国家の軍事化は日常生活の中では気がつきにくく、韓国の民主化運動を進めてきた人たちも徴兵制を問題にすることはなかった、という。韓国では軍隊の徴兵制を通じて「男らしさ」の規準が作られており、それが企業や大学の文化を形成している。軍隊では過度に男性性が強調されるため、兵役を終了した男性は自分たちを女性と同等とは見なさず、弱者に対する配慮もない。また、韓国の軍事化は日本を牽制するという面もあることを指摘した。

田村慶子氏はシンガポールを事例に取り、1997年のアジア経済危機以降の移住労働者の増大と圧倒的多数が女性であるという近年の国際労働移動の現状を説明した。短期的な労働力プールとして扱われる移住労働者女性たちは、地位も不安定で人権侵害などの問題を抱えており、国際人権保護システムの運用や人権 NGO による活動の重要性を強調した。

３つの報告はいずれもジェンダーの視点から見えないものを可視化することで、「歴史」や「国家」の壁に阻まれがちな思考や行動の捉えなおしを迫るものである。アジアを読み解く時の１つの方法として、また、女性だけでなく、男性も「男らしさ」という枠に囚われている社会の複雑さをより良く理解するツールとして、ジェンダーの視点の重要性が提起された。

■参加人数：31名

３）アジアの市民社会と国家 ── NGO 活動の現場から ──

日時：2006年11月14日（火）　17：00～19：00
会場：九州大学国際ホール

■プログラム

挨拶　坪田　邦夫（九州大学アジア総合政策センター 副センター長・教授）
講演
・モヒゥディン　アフマッド（バングラデシュ、Community Development Library 代表）
・アルバート　アレホ（フィリピン、アテネオ・デ・ダバオ大学教授）
コメント　大野　俊（九州大学アジア総合政策センター教授）
質疑応答
【司会】　小川　玲子（九州大学アジア総合政策センター助教授）

■概要

市民社会がグローバルな規模で台頭するなか、NGO は開発、紛争抑止、環境保全など多様な分野で活躍している。本講座では、「アジアの NGO 大国」と言われるバングラデシュとフィリピンから、詩人、研究者など多彩な分野で活躍する NGO 代表を招き、それぞれの国が抱える課題と NGO の取り組みなどを発表していただいた。バングラデシュは独立から35年、フィリピンは戦後の独立から60年とまだ若い国家だが、アフマッドさんの言う「代表者民主主義」(多数派の民主主義）で、辺境に追いやられる少数民族は「国内植民地化」に苦しむ共通点がある。この２ヵ国で NGO は少数民族、異教徒集団などマイノリティの権利擁護にも貢献している実情が明らかにされ、今後も各社会で重要な役割を担う可能性が示された。

■参加人数：36名

4）アジアにおける臓器移植 ── その法と生命倫理

日時：2006年12月22日（金）　17：00～19：00
会場：九州大学総合研究棟 IT room（病院地区）

■プログラム

挨拶　坪田　邦夫（九州大学アジア総合政策センター 副センター長・教授）
講演
・粟屋　剛（岡山大学大学院教授）
・金森　修（東京大学大学院教授）
質疑応答
【司会】　丸山　マサ美（九州大学医学部保健学科講師、九州大学アジア総合政策センター協力教員）

■概要

1997年日本では、臓器移植法が成立したが、日本人の生命観に配慮して、脳死判定には、欧米に比べて厳しい基準が設けられている。

今回は、特に、貧困を理由に臓器売買が行われている国、死刑囚からの臓器移植が行われている国といったアジア諸国の現状について、アジア諸国の実態調査を行い、その原因分析・法規制について医事法を専門とする粟屋剛教授（岡山大学）に御講演いただいた。また、その報告に対する生命倫理の問題については、科学思想史・現代科学論を専攻する金森修教授（東京大学）のコメントから、フロアーに参集した医師、医学生等と日本の現状について討議した。

■参加人数：43名

６．九州大学アジア塾　実施報告

九州大学アジア総合政策センターでは、アジアとの文化・芸術交流、国際開発交流、または貿易やビジネス等、様々な分野でアジアと出会い、交流していく際に必要となる実際的、実用的な知識やノウハウを提供することを目的として「九州大学アジア塾」を開催している。2006年度は以下を開催した。

第３回九州大学アジア塾

貧困と戦争と環境問題って関係ないと思ってた
── ボクと日本とアジアの未来 ──

日時：2007年１月14日（日）　13：00～16：00
会場：九州大学農学部５号館117

■プログラム
(オープニング)
(田中優トークライブ)
(クロストーク)
　田中　優（未来バンク事業組合　理事長)
　坪田　邦夫（九州大学アジア総合政策センター教授)
　ファシリテーター：佐藤　剛史（九州大学大学院農学研究院助手)
(エンディング)

■概要
田中優氏は、アジア途上国などで紛争や環境破壊が進んでいるが、自分たちの預金が回り回ってそれに加担していることを痛感し、それを避けるため自分たちでバンクを作った。自分たちのお金は銀行に預ける代わりに「未来バンク」に出資し、貧困や環境問題解決に使おうというのである。輪が広がり、多くの市民が参加し、様々なエコ事業に低利で出資ができるようになった。データーを駆使して説得力のある議論を展開し、かつ、自分たちで考え行動を始めようという氏の訴えは参加者の強い共感を呼んだ。コメンテーターの坪田は、氏の鋭い洞察や行動力に敬意を表しつつも、世界銀行などの融資も場合によって有効な手段であることや、貧困や環境問題に対応しようとしていることなどを指摘、関係者がそれぞれ様々なチャンネル・方法で問題解決に当たるべきとした。参加者からは、未来バンクの設立や運営、その持続可能性について田中氏に多くの質問がだされた。

■参加人数：180名

7．Soaked in Asia（SIA＝サイア）報告 ―― アジアの心の情報を発信する

芥川賞作家の特任教授髙樹のぶ子氏が、芸術表現を通じてのアジアとのかかわりを模索する。2005年のフィリピン編に続いて、2006年度はベトナム編と台湾編を行った。

―― SIA とは ――

作家髙樹のぶ子がアジアの文学作品を読み、作家と交流し、文字通り「アジアに浸る(soaked)」ことで感じた世界を様々な方法で発信するマルチイベント。アジアに生きるフツウの人々が何を望み、何を愛し憎しみ、何を守りたいと感じているのかを肌で実感できるものの一つに文学がある。文学作品には、知識ではなく感性の深い部分で感じる肌触りや、理屈を超えて実感できる世界がある。文学を芸術や娯楽としてだけでなく、「心の情報」と捉え、アジアの作家との文学を通じたキャッチボールを行う。アジアの今を生きる人々の個の情報が物語として伝えられる時、それを受け止める側はその生を感じ、柔らかな感情を発動させる。髙樹のぶ子氏がアジアの作家や作品と出会う中で感じた情報は小説やエッセイに結実する他、以下のようなマルチ型の情報発信が行われる。

―― SIA の情報発信手法 ――

【Visit SIA】

髙樹のぶ子氏の感性に触れた１作家の１作品を選出し、半年に１カ国ずつ取り上げ、その作家や作品を生んだ環境を訪ねる。

【SIA-DAY】

アジアの作家の作品と文芸誌「新潮」に掲載された髙樹のぶ子氏の作品の朗読、Visit SIA で訪れたアジアの各地の写真とエッセイで構成されたフォトデッセイ、映像とアジアの文学に関するレクチャーや座談会などで構成される市民参加型のイベント。その構成は内容に応じて変更される。

【新潮 SIA】

アジアの作品と Visit SIA から得た果実を創作として表現し、文芸誌「新潮」にアジアの作品＋髙樹のぶ子作品として２作を同時発表する。

【文藝春秋 SIA】

「文藝春秋（毎年６月、12月号に掲載の予定)」に Visit SIA のフォトデッセイを発表する。

【SIA 人物紀行】

「西日本新聞」に Visit SIA で出会った人々の思い出を連載する。

【TV SIA】

Visit SIA や SIA DAY を含めた SIA のプロセスを30分番組として民放局で放映し、より多くの方々にアジアに浸っていただく。

【Web SIA】

髙樹のぶ子氏自身が SIA への想いや近況を文字や映像で語ると共に、TV SIA で放映したものをインターネット向けブロードバンド映像として再編集した動画の無料配信を行う。(2007年６月より開始)

■第２回　SIA-DAY（サイア・デイ）「高樹のぶ子と浸るベトナム！」

2006年９月30日（土）　アクロス福岡・円形ホール

この日は、高樹氏がベトナムを訪問して対談を行ったベトナムの作家チャン・トゥイ・マイ氏の小説『天国の風』や、高樹氏がベトナムを訪れて感じたことを表現したフォトデッセイ（写真とエッセイ）、『天国の風』に呼応する形で書かれた短編小説『ジャスミンホテル』などが朗読された。休憩時間には「おやつＳＩＡ」が行われ、ベトナムのお菓子や蓮茶が振る舞われた。(参加人数138名)

■第３回　SIA-DAY(サイア・デイ)「高樹のぶ子と浸る台湾！」

2007年３月17日（土）アクロス福岡・円形ホール

この日の対談の舞台とかかわりがある蘭と流木で演出された会場には、参加者170名の熱気が溢れ、独特の空間を生み出した。

当日のテーマは「循環する生命（いのち)」と題して、台湾のタオ族の作家シャマン・ラポガン氏との対談映像や、シャマン氏が暮らす離島、蘭嶼島（ランユィ）での生活を中心に構成された。高樹氏のタオ族の民謡を交えたレクチャーや台湾で感じたことを写真とエッセイで表現したフォトデッセイ３篇の朗読、海に生きるタオ族の世界観を見事に凝縮したシャマンさんの短編小説『天使の父親』と、それに呼応する形で書かれた高樹氏の実体験に基づいた書き下ろし作品『四時五分の天気図』などが朗読された。休憩時間には台湾のおやつ・発餅（ホワッグエー）や山査子餅が振舞われた。

(参加人数170名)

８．アジア関連研究室紹介（2006年４月～2007年３月）

アジア総合政策センターではアジア関連の研究を行っている学内各部門・研究室を訪問し、研究の概要をセンターホームページに掲載、広く内外に紹介した。

Vol.	研　究　内　容　・　研　究　者	掲載日
32	「インド仏教文学梵語文献研究史」人文科学研究院・岡野潔教授	(06.04.17)
33	「多民族社会における多民族共生と民族教育の整合性に関する比較研究」人間環境学研究院・竹熊尚夫助教授	(06.05.15)
34	「グローバル時代の技術と戦略の統合マネジメント ── 日系企業とアジア企業の比較分析」経済学研究院・塩次喜代明教授	(06.06.05)
35	「移住者と健康 ── 健康社会学的接近」医学部保健学科・平野（小原）裕子助教授	(06.06.15)
36	「旧韓末の教育 ── 日本との関わり ──」韓国研究センター長・稲葉継雄教授	(06.07.03)
37	「九州帝国大学における留学生に関する基礎的研究」大学文書館・折田悦郎教授	(06.07.21)
38	「多文化・多様化状況における日本語教育理念及び方法論の探求 ── 南方占領地の事例より」比較社会文化研究院・松永典子助教授	(06.08.02)
39	「『天主実義』とその思想的影響に関する研究」人文科学研究院・柴田篤教授	(06.09.01)
40	「白色腐朽菌の研究と関連プロジェクト ── その応用と可能性について ──」農学研究院・近藤隆一郎教授	(06.09.15)

[研究室紹介の一部（抜粋）紹介]（詳細はアジア総合政策センターホームページ参照）

１．32回目「インド仏教文学梵語文献研究史」人文科学研究院・岡野潔教授

「インドには3000年にわたる文献の蓄積がありますから、それらの文献に基づいてインドの基層・表層の文化の変遷を研究することが可能なのです。哲学文献では生活レベルの情報がほとんど切り捨てられていますので、むしろ文学的な文献から、インド文明の基層文化を知るための重要な情報を得ることが出来ます。文学的な文献の中には私たち日本人にとってなじみ深い、仏教文学文献が含まれています。仏教の中には2000年にわたる文学的文献の長い歴史があるのです。私は研究者として古代から現在にかけたサンスクリット仏教文学史を記述してみたい、世界で未だ成し遂げられていないこの課題に挑みたいと熱望しています。その第1段階として、私はまず「インド仏教文学研究史」をまとめました。今から150年程前にヨーロッパで始まったインド仏教学における文学研究の流れを概観できるものです。

さらに、この「インド仏教文学研究史」の最大の特徴は世界中に散在する仏教文学文献写本の所在を徹底的に調べ盛り込んだことです。ヨーロッパやインドとその周辺の写本情報を集めた上で、過去の研究者の研究をまとめたので、さらにこの分野の将来の研究指針とすることができます。また、現在は写本に基づく校訂と翻訳作業を始め、ほとんど未開拓の領域であった中世ネパールのアヴァダーナ・マーラー（梵文仏教説話集）の諸作品を研究しています。文学的な文献を調べることによって、私たちはインドの基層と表層文化をいっそう深く理解できるのです」

２．33回目「多民族社会における多民族共生と民族教育の整合性に関する比較研究」
人間環境学研究院・竹熊尚夫助教授

「マレーシアはマレー系・中華系・インド系をはじめとするさまざまな人種・民族を有する多民族社会で、宗教や言語も多種多様です。しかしマレー人を中核とした国民統合理念におけるマレー人優遇政策は今なお進められており、教育にも大きな影響を与えています。例えば公立の小学校には、三民族それぞれの言語を教授用語とする学校がありますが、中等段階以降は国費補助を受ける学校はマレー語による教育に限られています。同じ東南アジアでもタイやインドネシアでは、しばしば強硬な同化政策が見られ、その際には移民である中華系も同化され、学校教育でも移民言語としての中国語はそれほど認知されてはいないようです。このように民族的なものを排除する国が多い中、マレーシアはそれを極端に排除することなく、現在は多民族共生の方向に進もうとしています。その点がマレーシアの教育の特徴であり、難しさでもあります。マレーシアの教育から日本や世界の教育を見ることによって、学校が多民族社会において果たす新たな機能が見えてくるのではないかと考えています」

３．34回目「グローバル時代の技術と戦略の統合マネジメント ── 日系企業とアジア企業の比較分析」
経済学研究院・塩次喜代明教授

「昨今、日米の多くの企業で、技術とビジネスが結びついていない現状に反省が出ています。技術者はマネジメントに疎く、経営者は技術を評価する能力に欠けているという状況が長く続いているからです。そこで注目されているのがMOT（Management of Technology，技術マネジメント）です。企業の持続的な発展のためには、独自な技術力をビジネスに結びつけ、経済的価値を創出することが重要ですが、MOTはこのことを課題にしたマネジメント論です。

日本では産学連携が急速に進みはじめMOT教育が本格的に始動した段階なのですが、中国や韓国では状況が異なります。産学連携は密ですが、MOTは中国では未だ存在せず、韓国でもほとんどありません。両国とも米国型、日本型の両方の経営を学び、したたかに独自のビジネスを模索しており、中には大変優れた企業があります。一例を挙げれば、日本型経営をベースに独自の経営システムを構築してきたサムソン、大学発ベンチャー企業の東軟集団が成功を収めています。サムソンは日本的な人間中心の経営をしつつ米国型の人事体系を練り上げ、独自の技術を梃子に成長を続けています。中国瀋陽の東軟集団は独創的なソリューション技術を中国企業自らで発展させている稀有な例で、中国政府の進める東北開発のモデル企業としても注目を集めています」

４．35回目「移住者と健康 ── 健康社会学的接近」 医学部保健学科・平野（小原）裕子助教授

「私はこれまで移住者（在日外国人、外国人労働者など）と健康に関する研究をしてきましたが、日本における外国人の健康に関する研究の多くが医療専門家によってなされ、在日外国人は社会的にマイノリティであり支援の対象である、と結論づけられるのが一般的でした。私の研究でも日本人から差別的な待遇を受けるなど人間関係の劣悪さは在日外国籍住民の精神的健康に負の影響を与えていることが示唆されたように、それは一つの正しい見解ではあります。しかしそれだけでは、在日外国人がいかにも脆弱であり、日本人や日本社会が守ってあげなければ存在し得ない人たちであるかのような印象を受けてしまいます。私はむしろ、日本に生活する外国人たちがどのように自分の問題を捉え、どのように対処しようとしているかを明らかにすることで、日本人との関係をよりダイナミックに捉えることができ、それらの社会関係と健康との関連を客観的に位置づけることができるのではないかと考えています。

実際に、フィールドで在日外国人に接してみると彼らはかなりたくましく日本社会で生きていることがわかります。たとえば在日フィリピン人などは、カトリック教会をベースとして同国人ネットワークを形成しており、日本人の配偶者や友人・同僚などのつてを頼って、生活のあらゆる問題に対処しようとしています。例えば、お金がなくて病院にいけない同胞のために、知り合いの日本人の医療関係者に依頼しカトリック教会で無料医療相談を実施するため、彼ら自身が企画運営に携っています。

このような活動を通して、在日外国人自身が自分たちの問題を相対化し、より適切な支援を日本社会側に要求できるまでになってきているといえます」

５．36回目「旧韓末の教育 ── 日本との関わり ──」 韓国研究センター長・稲葉継雄教授

「わたしは今までに、植民地以前の韓国の教育に関する著書を４冊執筆しました。旧韓末における教育を、「日語学校」と植民地政策のかかわり、教員をはじめとする日本人の関与、さらに居留邦人(「内地人」）の教育も含めてトータルに把握すべく、事例研究を重ねた成果です。この一連の研究によって、従来の「日本側の侵略と韓国側の抵抗」という一つの図式のみでは捉えることのできない、当時の教育の実態が明らかになりました。たとえば日語学校の調査では韓国側に、日本語を学ぶメリットもあったことがわかりました。日本側は、植民地政策の地ならしとして日本語を学ばせたのですが、韓国側にとって日本語を学ぶことは、西洋諸国の言語より文法的に近い言語である日本語に翻訳された、数多くの西洋近代の著書を読むことにつながっていたのです。つまり韓国側にとって日本語は、韓国近代化のための一つの有効な手段と考えられていたのです。この意味で日語学校は、旧韓末の教育を支えた一つの柱と位置付けることも可能でしょう。無論、日本側の反省すべき点もあります。当時、日本側は韓国政府に高利率で貸し付けをし、なんとそのお金で日本人教員や職員を雇わせていたのです。たとえばあまり知られていませんが、与謝野鉄幹や岡倉由三郎（岡倉天心の弟）も教員として活躍しました。また併合以前における日本語教育は、強制力こそなかったものの、植民地化に向けての教育だったことは否めません。一般的な日本教育史には、日本人が深く関与しているにも拘わらず、旧韓末の教育に関する研究は欠落しています。しかしわたしは自戒の念も込めて、旧韓末期の教育も日本の教育史の一部として捉えるべきだと考えています」

６．37回目「九州帝国大学における留学生に関する基礎的研究」 大学文書館・折田悦郎教授

「戦前期の個別大学（特に帝大）における留学生の受け入れに関する研究は、これまでほとんど行われず、史料の収集といった基礎的な作業もなされていませんでした。これは戦前の史料があまり残されていないことに起因しています。今回の研究では、九大にある史料を収集・調査することから始め、「九州帝国大学留学生名簿」を作成しました。さらに研究協力者の陳昊・佐喜本愛氏による中国人留学生（九州帝大卒業生）への現地（中国）でのインタビューや、「九州帝国大学新聞」留学生関係記事の収集、「九大医報」(郭沫若特集号）の史料復刻も行いました。

九州帝大は、いわゆる「傍系」入学者（旧制高等学校を経ない入学者）を多く受け入れたことで知られる大学でした。ちなみに帝大への入学は、中学校（旧制）から高等学校（旧制）を経て大学に進学するコース（いわゆる「正系」）が原則であり、この「正系」の志望者が入学定員に満たない場合に限って、「傍系」入学が認められていました。しかし九大では、医学部を除く各学部で「傍系」入学が認められており、とくに当時の法文学部（現在の法、文、経済学部等の母体）では多数の「傍系」入学者を受け入れ、その結果、留学生の割合も高くなっていました。それは、九大の留学生の多くが日本の高等学校を経ない、「傍系」入学者だったからです。戦前期を通じてもっとも多く九大への留学生を送り出したのは「中華民国」(中国）で、ついで「朝鮮」、「台湾」と続きます。九大が早くから多くのアジア留学生を積極的に受け入れてきたという事実は、九大史上の一つの特長と言ってよいと思います」

７．38回目「多文化・多様化状況における日本語教育理念及び方法論の探求 ── 南方占領地の事例より」 比較社会文化研究院・松永典子助教授

「わたしは日本軍政（1941–45年）下の南方占領地のうち、特にマラヤにおける日本語教育、ひいては教育における異文化接触の問題について研究しています。マラヤとはシンガポールとマレー半島11州を指しますが、近年では研究が遅れている北ボルネオ地域も対象としています。多民族社会であるこの地域を考察することで、現在でも課題となっている多文化・多様化状況における日本語教育の新

たな理念や方法を掘り起こすことを目指しています。

軍政下のマラヤでは、日本軍の方針に沿った画一的な教育が行われていたわけではありませんでした。現地での調査で、特に半島部と北ボルネオでは日本語教育の状況が大きく異なっていることがわかりました。半島では南方軍政の中心部シンガポールに近いという地理的条件もあって、多くの教育機関が存在し、多種多様な教科書が作成されました。一方、北ボルネオでは軍事的側面に集中して人的資源が投入されていたために教育まで手が回らず、十分な日本語教育を行うことはできなかったのです。当時の教科書も調査したのですが、軍政監部が作ったもののほかに、現地の人々が作成・刊行したものが多数ありました。これらは一元的に、皇民化政策を促そうとしたもののみではありませんでした。さらに英領マラヤ時代の教育がエリート主義的であったのに比べて、日本語教育者は民族によって差別することが少なかったようです。生徒に対して支配者という態度で接する者ばかりではなく、「同じアジアの民族として」という意識で教育に取り組んだ者もいました。以上のように、概念レベルではマラヤでの日本語教育は「皇民化」教育、「国語教育」と捉えられがちでしたが、教育現場をみてみると一概にはそうは言えないのです」

８．39回目「『天主実義』とその思想的影響に関する研究」 人文科学研究院・柴田篤教授

「『天主実義』とは、イタリア出身のイエズス会士マテオ・リッチ（1552～1610）が中国文によって著述し、利瑪竇（りまとう）という中国名で出版した上下２巻、全８篇の書物です。中国人の学者（中士）と西洋人の学者（西士）との問答の形式で、カトリック・キリスト教（天主教）をめぐる様々な議論が展開されています。中国社会の指導者、いわゆる文人たちの教えである儒教が、基本的にカトリック信仰に反するものを含まないと考えたリッチは、儒教を援用しつつカトリック布教を行おうとします。この書物の最大の特徴は、いわゆるカテキズム（教理問答書）でありながらもカトリック教義の一方的な押し売りにはなっていない点です。リッチは布教にあたってまず中国語を徹底的に学び、さらに中国の思想や宗教を深く研究した上で、キリスト教と中国思想との実質的対話を試みたのです。このように相手の考え方を尊重し、理解したうえで「対話」を試みたリッチの姿勢から、我々は現在でも多くのことを学ぶことができると思います。この『天主実義』は、後世の東アジア世界にも大きな影響を与えました。日本にも早い時期にもたらされたようで、1604年にはすでに林羅山（1583～1657）によって読まれていたことが分かっています。その後、鎖国の時代を迎えると、『天主実義』も禁書に指定されたのですが、禁書の一部は確実に国内に持ち込まれて読まれていました。国学者である平田篤胤（1776～1843）は、リッチの『畸人十篇』『天主実義』などを下敷きに『本教外篇』（1806）を著しており、随所に天主教の影響がみられることが指摘されています」

９．40回目「白色腐朽菌の研究と関連プロジェクト ── その応用と可能性について ──」 農学研究院・近藤隆一郎教授

「私の研究室は『森』をキーワードに、森が持つ多様な機能を解明して人々の健康や環境に幅広く貢献すべく、様々な研究を行っています。具体的には、森林圏微生物の働きによる炭素循環、特に白色腐朽菌（はくしょくふきゅうきん）とよばれるキノコ類のもつ特異な分解機能の研究、バイオエタノールに代表されるような、循環型資源としての樹木（木質バイオマス）の高度利用の研究、LOHAS（Lifestyle Of Health And Sustainability：健康で持続可能なライフスタイル）をめざしての自然の香り成分や病気に有効なキノコ成分の研究などを行っています。

私どもの研究は、急速に発展しつつあるアジアのエネルギー資源確保問題やダイオキシンや廃プラスチックなどによる環境汚染問題の解決に一役買うことができると思っています。熱帯アジアの森林には、まだ未使用の資源があり、様々な機能を持った未知の菌類が存在する可能性があるにもかかわらず、未だ研究機関も研究者も少ないのが現状です。私の研究室ではアジアからの多くの留学生が学んでいます。みなさんがこの研究室で森のサイエンスを存分に学び、帰国してからもそれを応用して現地の人々の健康や、環境の修復に役立ててくれることを願っています」

９．2006年度 九大アジア叢書発行

アジア総合政策センターでは、九州大学におけるアジア研究の成果を幅広い読者層に判りやすく公開することを目的に「九大アジア叢書」を刊行しており、2006年度は以下の２冊を刊行した。

番号	タ　イ　ト　ル	執　　筆　　者
8	国際保健政策からみた中国 ── 政策実施の現場から	大谷順子（九州大学大学院言語文化研究院・助教授、アジア総合政策センター協力教員）
9	中国のエネルギー構造と課題 ── 石炭に依存する経済成長	三輪宗弘（九州大学附属図書館付設記録資料館・教授）、楊慶敏(北京師範大学珠海分校外国語学院・講師)

第５巻「村の暮らしと砒素汚染 ── バングラデシュの農村から」(谷正和　九州大学大学院芸術工学研究院・助教授著）が、第10回（2006年度）国際開発研究大来賞を受賞しました。

＊叢書は市販もされています。購入希望の方は下記へお問い合わせください。

九州大学出版会
〒812–0053　福岡市東区箱崎７－１－146
TEL: 092–641–0515

10．2006年度 アジア総合政策センター　共催・後援およびアジアとの交流支援事業 採択一覧

九州大学が掲げる「アジアに開かれた大学」をより推進するため、九州大学の教員、または学生が主体になって実施する、アジア研究に関する催事のうち、アジア総合政策センターが共催あるいは後援するものについて、広告物の制作費などの補助、及びアジア総合政策センターのホームページやメールマガジンなどを通じて支援を行う。2006年度に採択したものは下記表の通りである。(※申請８件、採択８件)

番号	申請者			催事名	ＡＣ支援
	氏名	所属	職名		
1	吉村　淳	農学研究院	教授	≪JSPS アジア・アフリカ学術基盤形成事業≫ “Science of Hybrid Rice: Breeding, Cropping Patterns and the Environment”	後援、広報、広告物補助
2	牟田耕一郎	病院アジア国際医療連携室	講師	アジアの健康を考える会　第２回市民講座 「知ろう！ アジアの病気 ── 広がるエイズ ──」	後援、広報、広告物補助
3	後小路雅弘	人文科学研究院	教授	マドンナたちのフィリピン ── 女性・キリスト教・多層文化 ── 展	後援、広報
4	溝上　展也	農学研究院	助教授	Asia Forest Workshop 2006 －Interdisciplinary and Transnational Discussion on Multiple Impacts of Forestry and Landuse Change in Tropical Asia	後援、広告物補助
5	藤原　惠洋	芸術工学研究院	教授	空間を生み出す繊維の力 ── 李粉善ファイバーアート展	後援、広報、広告物補助
6	加耒　恒壽	医学部保健学科	教授	第１回九州大学保健学科国際フォーラム	後援、広報、広告物補助
7	山下　邦明	言語文化研究院	教授	シンポジウム「紛争をなくすために、私たちにできること」── NGO の海外協力と地域展開を考える ──	後援、広報、広告物補助
8	小山内康人	比較社会文化研究院	教授	第３回ゴンドワナからアジア国際シンポジウム	後援、広報